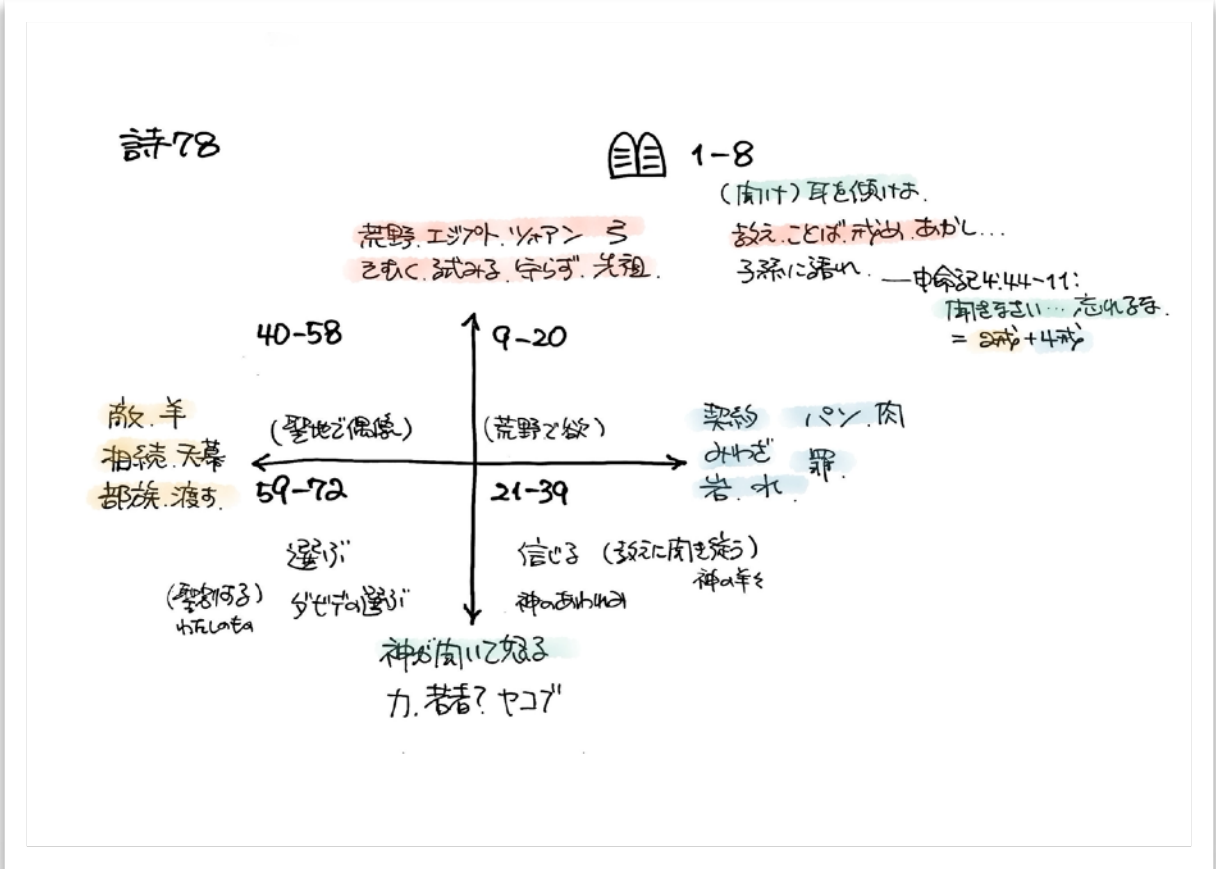
詩篇78篇



詩篇78篇です。78篇は詩篇の中で119篇を除いて一番長い詩篇です。繰り返し何度も何度も「神様の言うことを聞かない、悔い改める、でもまた聞かない」ということを、言いますので、どこで切っていいのかが難しい詩篇でした。接続詞が多く「そして、そして、そして」という形で続いています。

78篇の最初のところはわかりやすいです。「わが民よ聞きなさい」と申命記のような感じの出だしになって、歴史のことをずっと語っていく。「エジプトから連れ出されて荒野を導いて」という話がずっと続いて、最後に、「エフライムの天幕を捨ててダビデを選んだ」というところで終わります。接続詞がたくさんあるので、なるべく接続詞のところを切らないようにと考えて分けていきました。

興味深いところでは、78篇の21節「主は聞いて憤った」、59節も「神様は聞いて憤った」というところから、ひとつの段落のように見えます。他にも、神様の怒りは出てくるのですけども、「神様は聞いた」「わが民よ聞け」と言っていることに対して、「神様が聞いた」というところから、このさばきが始まるような感じです。

最初の1節から8節までと、9節からのところを分けるのですけど、そこも少し複雑なのが、9節から11節が、エフライムの人は恐れて戦わなかったということがあって、「エジプトの地ツォアンの野で」と来るのですね。この9節から11節は、カナンに入った後のような話だと思います。それがどうしてここに出てるのかなということで、この9節

から11節は、この出だしの最後に来るものなのか、次の段落の最初なのか迷いました。「幾たび彼らは野で神に背き」という40節から42節のところも、「神様に背いて試みた」ということがあって、「エジプト、ツォアンの野で」ときていますので、この40節から42節と、9節から11節の役目が同じようなものなのかなということです。

本文に色を塗ったもので言うと、4つに分けたのが、9節から20節、21節から39節、40節から58節、59節から72節。この4つに分けているのですけど、この右側の9節からと、21節からのところに共通して出てくることばに、水色で色が塗ってあります。この2つのどちらにも出てくることばを見ると、「契約、パン、肉、奇しいみわざ、岩、水、罪」です。40節からと、59節から。こちらも上にも下にも出ていることばというの見ると、「敵、羊、相続、天幕、部族、渡す」というようなことばが共通しています。上の段の9節からと、40節から。ここで共通しているのが、「荒野、エジプト、ツォアン、弓、背く、試みる、守らない、先祖」というなことが共通しています。残っている下の段の21節からと、59節からのところは、黄色いところなのですけど「み力、聞く」というぐらいで、そんなに多くはないです。「ヤコブ、ヤコブ」と。

4つに分けてみると、前半の方(9節からと21節から)は、荒野で水がない、パンがない、肉がないと言って、自分たちの欲が満たされてないことを文句を言ってる。神様を信じなければいけないのに、憐れみに信頼しなければいけないのに、というような出来事を思い出します。

後半の40節からのところは、敵が出てきます。エジプトとツォアンの野でと言っているときも、奇跡を行ってエジプトを倒して連れ出した。聖地に連れ出した。そして約束の地に住まわせたにも関わらず、偶像礼拝をする。それで神様がその住まいを捨ててユダを選んだ。そして相続としましたということです。こちらの後半は、敵に対して勝つと平和な住まいに住めるという話でしたよね。ですから、敵に対して勝ちます。聖なるものになるはずの場所だった。聖地のはずだったところを汚した。それで捨てられて、ダビデが聖別された。選ばれた。59節からのところには、選ぶということばが出てきます。21節からのところは、信じる。御声に聞き従う羊たち。59節からは、御声に聞き従う羊たちを聖別した。私のものである神様のことばを聞くのも私の羊であるということが、この2つ(21節からと59節から)に共通している。特に神様が聞くということが強調されていますけども、21節からの終わりのところは、神様はあわれみ深く怒るのに遅い神であるという神様の名前を宣言したその契約に、神様が忠実だったということが、ここで強調されていますよね。

1節から8節を見ると「シャマ・イスラエル」じゃないのですけれども、「教えを聞き」が「耳を傾けよ」から始まります。聞く、そして耳を傾けるというのは、どちらも同じことですよね。聞くことがもっと強調されている感じです。耳を傾ける。それは申命記4章の終わりのあたりから11章までで、「ずっと私はこうしてきたということを忘れるな、それを子供達によく教えなさい」そういう歴史をずっと語っているのが続きます。その11章まで続く中には、ほとんどが安息日の話です。パンの話。それと偶像礼拝の話。これがずっと繰り返し出てきます。第2戒と第4戒。聞きなさい、忘れるなというその教え、戒め、証を子供たちに教える。その教えはエジプトから連れ出された時のストーリーを使いながら、2番目、4番目の命令を強調しているわけです。

この78篇でも、9節からと21節からの右側は、パンの話、マナの話ですから第4戒。40節からと59節からの左側は、敵に対して偶像礼拝の国に騙されない、偶像に騙されない、この世の力に騙されるなという第2戒が取り扱われているということで、この申命記の聞きなさいと言っている段落です。4章の終わりから11章までを思い出すような

ことを歌の形で話している。なおかつ、その申命記が与えられて、カナンの地で戦う時に、持っていたはずの教えを捨ててしまったエフライムではなくて、ダビデの子孫を選びましたということが、この78篇の大きな結論になっています。「神様は忠実です」という「もう絶対ダビデに与えた誓いは破りません」ということを、もう一度宣言される。そのダビデを選ぶというところで、この78篇が終わっている。でも残念ながら、この歴史があるにも関わらず、また忘れるということなのですけど、この78篇は、このダビデの後の人が、ソロモン以降の人たちが、思い出して歌わなければいけない歌であり、ヒゼキヤだったり、ヨシャパテだったりが、歌ったはずの歌ということだと思います。